



香港人が見た日本

その③⑧

香港の人たちが日本語で書いた作文をお届けするこのコーナー。今回は、香港大学文学部日本研究学科四年のポビー・チョンさんです。香港大と東京大学が行なっているサマープログラムに参加した際、学生寮で同室になった日本人学生のことをつづります。

「東大医学生との十二日間」 張景豪(ポビー・チョン)

今年の夏休み、私は東大の医学生から十二日間「人生の授業」を受けた。香港大―東大合同サマープログラムに参加し、香港で活躍するビジネスリーダーに話を聞き、教授の講義に出た。最終日には、五人のグループに分かれて、プログラムの成果を発表した。

プログラムの最中、私は東大医学部の原くんとルームメイトで、同じ部屋で暮らしていた。正直なところ、医学生と寝食共にしながら課題に取り組むことに、とても緊張していた。

プログラムの二日目、朝六時頃、こめめん、起こしちゃった?という声があった。私はまだ寝ているのに、彼は医学の宿題のレポートを書いていた。予想した通り、医

学生は真面目で、毎日忙しい。

でもそんなに忙しいのに、なぜ原くんはサマープログラムに参加するだろう。

香港人の学生は、サマープログラムに参加する時、プログラムの終わりに、終了証書がもらえて、履歴書に記入できるとすぐ考える。しかし、原くんにとっては、プログラムの内容は、医学の知識や医者との資格に関係ない。

ある夜、グループでビクトリア・ハーバーに行き、「百万ドルの夜景」を見ていた。その時、原くんになぜプログラムに参加したのか質問を投げた。

「将来、海外で医者として働くことも視野に入れていいるから、普通の授業や観光などでは得られない貴重な体験をするのは、いいんじゃない?」

私は、彼の話に感銘を受けた。これまで私は、スコットランドと日本で合計二年間留学生生活をし、またインターシップもしたが、それが何のためかを忘れていた。貴重な体験が自分自身の視野を広げると考えれば、人生が有意義になるだろう。

医学生に心構えを治してもらって、ありがたい。



原くんと筆者